

令和2年11月19日

インタビューこの人に聞く

川添 善行 氏



プロフィール1979年神奈川県生まれ。東京大学生産技術研究所准教授／博士（工学）。2001年東京大学工学部建築学科卒業。オランダのデルフト工科大学に留学（2002～2004）を経て、帰国後、内藤廣氏に師事。2004年東京大学大学院修士課程修了，2011年東京大学川添研究室発足。2014年より現職。現在，空間構想一級建築士事務所所属。東京建築賞最優秀賞，日本建築学会作品選集新人賞，グッドデザイン未来づくりデザイン賞，ロヘリオ・サルモナ・南米建築賞名誉賞など，国内外の賞を多数受賞し，日蘭建築文化協会会長などを務める。主な著書『このまちに生きる—成功するまちづくりと地域再生力』（2013，彰国社），『空間にこめられた意思をたどる』（2014，幻冬舎）など。

（前文）

川添善行准教授に，東京大学総合図書館の改修プロジェクトに携わったことで得た建築デザインに対する知見を伺った。

■東大総合図書館の改修プロジェクト

私が32歳の時に研究室ができてから10年の間、いくつもの建築物を設計しましたが、ずっと関わり続けてきたのがこの東大図書館のプロジェクトです。明治時代にできた最初の図書館は、1923年の関東大震災で火災のため焼け落ちています。その後内田祥三先生が本郷キャンパス全体をデザインされて、図書館も新築されました。今回のプロジェクトは、1928年に竣工した図書館の改修と、隣接した新しい図書館の新築です。

限られた予算の中で、大学にとって重要な建物である図書館を改修するにあたり、建築的に言えば、何を残して何を残すかを判断していかなくてはなりません。そこで、価値判断の基準として二つ、「モノとしての価値」と「コトとしての価値」をテーマにして判断することにしました。「モノとしての価値」というのは、立派な建材を使っているとか、手の込んだ意匠があるとか、いわゆる一般的な建築の歴史で捉えてきたような価値のことを言っています。「コトとしての価値」というのは、それとは少し違って、その場所で起きた出来事やその場所にまつわる記憶を価値として評価します。例えばこの部屋で食事をしたとか、この部屋で友だちと一緒に受験勉強をしたとか、そうした記憶がすべて、図書館の冊子や大学の100年史といった資料に残っていますので、その情報を図面に部屋ごとにプロットして行って、どういう出来事がどの場所にあったかをトレースしていくわけです。すると、部屋ごとに思い出の量が多い部屋とそれほどでもない部屋が見えてきます。

そうしますと、「モノとしての価値」と「コトとしての価値」とが、それぞれ評価できますので、簡単に言えば、両方高いものは非常に歴史的な価値があると評価して、そこは出来るだけそのままの形で保存していきます。また、両方ともが相対的に低いものについては、現代的なものにつくり変えていくというふうに、それはコスト的な割り振りもそうですし、どこまでを保存して、どこまでを更新していくかという価値判断として、このような基準を設けて設計を進めました。

■改修における様々なアプローチ

図書館に入ってすぐの大階段は、おそらく東大生にとって記憶に残る光景の一二を争う場所だと思います。ここは東大に所属する学生全員が通っていく場所で、とても象徴的で重要な空間と言えます。今回、この空間をどう保存していくかが、非常に重要なテーマの一つでした。

大階段の赤絨毯は、創建当時はなかったのですが、いつの頃からか、この赤絨毯になっていました。これについて、創建当時の姿に戻した方がよいのか、そうでないのか議論となりました。今回、私たちが選択したのは、必ずしも創建当時の姿に戻せばよいわけではなく、多くの東大生にとって、この赤絨毯の大階段が記憶に強く残っているため、創建当時の姿にこだわらずに、赤絨毯を新設して敷き直すという判断に至りました。

築90年ともなりますと、当時の施設営繕の発注書などの資料を全部たどっても、産地が特定できず入手困難なもの、新しくつくるのが難しかったものは、出来るだけそのままの素材で残しています。また、古い写真や、内田先生がスケッチをたくさん残されていますので、そうしたものを参考に復元しています。

つまり、単に改修と言っても、歴史というものに対するデザイン的なアプローチにはかなり幅があるのです。モノとして保存する場合、壊れてしまったものを形だけ復元する場合など様々です。歴史を大事にしようというところまでは誰もが言えると思うのですが、では、それを実際にどう大事にするのか。実際の建築デザインの現場においては、まだまだ様々な解釈が存在しています。今回のプロジェクトでは、そうした様々なものを共存させることを是として、重要なのは、どういった考えを基にそうしたのか、どこがオリジナルのままで、どこを変えたのかをきちんと記録として残しておくことと考えました。

■噴水の下空間

改修した本館の地下1階から、地下に新築した別館につながっていて、本館と別館はここで空間的に接続していますが、法律の影響も考慮して構造的には別の建物としています。この別館は躯体をつくりながら沈めていく「ニューマチックケーソン」という高度な技術を要する工法でつくられていて、とても急進的な建物となっており、本館と接続する地下1階では地下の空間に光が降り注ぐよう設計しています。この光が何かと言いますと、地上に設置された噴水が地下のトップライトを兼ねていて、光が噴水の水面を通ることで、水面がゆらゆら揺れるような光が地下に入ってくるという空間になっています。

部屋の周りの天井は全部、杉の無垢材でつくっており、この空間は「世界で一番うるさい図書館」を目指しています。本館には何百万冊もの蔵書がありますが、この新しい図書館には本がありません。代わりに何をするかというと、議論をするのです。本に答えを求める時代は既に終わっていて、これからの時代は、友人、先輩、後輩、先生との議論の中で新しい課題を見つけ、その課題を自分で解決していくことが大学教育に必要とされます。そのような議論の場としての空間となるよう、ここはうるさい図書館を目指しているのです。

乱反射をさせるものが周りがあると音が散り、音のざわめきをつくることでうるささがうまくばらけるため、天井の無垢材は角を全部落とし、音が様々な方向に散っていくようにしました。ここには全部、主伐期を迎えた杉材を使っていて、日本の杉はまだ使われていないという中で、何とか新しいデザインとして使えないかと考えました。

図書館だけは全学の建物なので、設計に関しては、やはり全学の先生方から様々なご意見をいただきました。最初は、地下の図書館なので、その地上部分に水があるのが心配だったため、噴水をなくし、ドライな広場とする設計でずっと進めてきたのですが、震災からの復興の中で二度と火事に遭わないようにということと、防火水槽としての噴

水というのが切り離せないものですから、この噴水をこの場所に残すというのは、場所の意味からしても大事なのではないかと、噴水をシンボリックに残す案に変更したのです。 _

■改修と新築の螺旋的關係性

建築をつくるというのは、使いやすいことはもちろん最低限必要なことですが、そこだけで終わっては、建築の力を十分に使い切れていません。時間の蓄積といったことを、きちんと器として残すことができるのは、おそらく建築だけです。別館工事では関東大震災で焼失した古い図書館の基礎部分が発見され、この残されたレンガ基礎を起点・軸線にして今の本郷キャンパス全体が設計されたことが分かりました。これまで誰にも見えてなかった歴史が、ここで可視化されたのです。そこで、このレンガを噴水周辺のベンチに使用して残すことにしました。今回のプロジェクトでは、近世、近代、戦前、戦後、そして今回の21世紀のデザインが重ねられるという形で、時代を積層していく建築をつくることができました。

仮に、新しいと思われるものをつくったとしても、それがどこまで自分のアイデアなのか、既存の状況がそう考えさせてくれたのかという線引きは難しいものです。噴水の下空間は評価をいただいています。これも私のデザインがよいからというわけでは決してなくて、あの場所に壊しがたい噴水があり、やむを得ず図書館の上に乗せてしまったことで、そこから新しい価値が生まれたのだと言えます。

つまり、設計の中にも、他者性、自分がコントロールしきれないものが入り込んでくることの豊かさや魅力があるはずで、単にデザインを自分の表現の延長として見るのではなくて、外の要因が入り込んでくる状況をどうつくるかが、21世紀の建築の設計においては重要だと考えました。

最近、リノベーションが人気ですが、すべて新築でデザインされたものとは違う、居心地のよさがあるのでしょうか。逆に、新築の居心地が悪いのなら、何か設計者のエゴ

みたいな問題があるのかもしれませんが。新築よりも、昔からある建物やリノベーションされたものが人々の心を打っているのなら、専門家として考え直さなければいけません。

ただ、やはり改修ならではの豊かさというのは必ず存在します。それをどのように価値づけるかも大事ですし、その先には、改修というものがつくってきた豊かさをもう一度新築で実現するような、改修と新築は反対なのではなくそれぞれが持っている豊かさをどのように螺旋的に改善していくかが大事なのだと思いました。

(一財) 建築保全センターの皆様には、是非、こうした啓蒙活動を幅広くしていただいて、改修プロジェクトの中から世に問うような傑作が生まれてくることを切に願っております。